

鑑賞の充実と育てる資質・能力

－ 鑑賞ワークシートの視点を考える －

指導主事 島 崎 裕
Shimazaki Yutaka

要 旨

図画工作、美術の学習内容は「A表現」と「B鑑賞」から構成されている。図画工作や美術に関する諸能力は、これら二つの学習が、バランスよく総合的になされることによって高まるのである。しかし、実際の学校での指導は「A表現」の内容に偏り、年間指導計画に「B鑑賞」の時間が十分に位置付けられているとは言い難い。そこで、分かりやすく信頼性のある評価が容易な鑑賞の方途としてワークシート作成の視点を示す。

キーワード： 鑑賞の資質・能力、ワークシート、信頼性のある評価

1 はじめに

従来から「A表現」の領域では、指導の在り方やその工夫、題材研究やカリキュラム開発等は現場の教員や各教育研究団体などによって熱心に行われてきた。しかし、「B鑑賞」の領域については、内容は知識・理解が中心で、指導にも専門知識が必要であるという印象があって、創造活動を重視してきた今までの図工・美術教育から敬遠されてきた傾向がある。と同時に、題材や指導法の研究・工夫があまり積極的でなかったことがその傾向に拍車をかけてきたとも言える。

学習指導要領（図画工作科、美術科）の改善の基本的方針の一つに「小学校、中学校及び高等学校を通じて次のような観点を重視する」と謳われている。

児童生徒が生活を明るく豊かにし生涯にわたって楽しく描いたりつくったりする創造活動を促すことを重視し、表現や鑑賞の喜びを味わうとともに、豊かな表現活動や鑑賞活動をしていくための基礎となる資質・能力を一層育てられるようにする。（下線は筆者加筆）

このことから分かるように、表現より鑑賞が重要だということではなく、表現と鑑賞は一体であり、豊かな鑑賞が表現を高め、また多様な表現が鑑賞を高めるのである。

生涯にわたって美術や芸術を愛好するためには教養が大切かもしれないが、そのもとになるのは豊かで質の高い体験なのではないか。学校教育においてこそ発達段階に応じた体験を系統的・意図的・組織的に行い、適切に指導し評価していかなければならないと考える。

2 研究目的

鑑賞の充実が強調されるなか、実際には様々な理由から表現活動に偏った図画工作や美術の授業が行われている。その要因を探り、いかにすれば充実した鑑賞の取組をカリキュラムにきちんと位置付けることができるかについて考察する。

3 研究方法

(1) 全国的な図画工作・美術教育の調査結果からの分析と現状の把握

- (2) 近府県の美術館発行のガイドブック等の内容分析と事例研究
- (3) 研修講座における鑑賞ワークシートの試作と分析による研究

4 研究内容

- (1) 「図画工作科・美術科における鑑賞学習指導についての調査」から

平成15年度に、日本美術教育学会が図画工作・美術の鑑賞領域における学習の充実と指導の在り方を探るために、全国規模の調査を実施した。対象は全国の小学校及び中学校美術科の教員で、小学校714件、中学校447件の有効回答数があり回収率は約23%であった。以下、14項目の中から主な項目について概略を記す。

ア 図画工作・美術の学習指導への取組について

小学校では、9割以上（「積極的（42.5%）」と「やや積極的（50.1%）」の計）の教員が授業に前向きに取り組んでいるという結果であるが、図工以外の教科に多くの時間が割かれていることも事実である。また、中学校では、美術への学習指導について「不十分だ（63.1%）」が「できている（30.8%）」を大きく上回っている。「授業時間数が十分取れない」が主な理由である。

イ 図画工作や美術の学習の意義について

小・中とも「ものづくりだす喜び」が最上位で、「美しいものを感じる心」「個性の発揮・自己表現」「豊かな情操」といった情意面の意義がそれに続き、そして「鑑賞の能力」は「技術や技能面」の次にきて最下位となっている。ここでも「鑑賞」領域は「表現」領域に対して軽視されている傾向にあることが分かる。

ウ 鑑賞学習の目的と意義について

小・中いずれも、鑑賞学習を表現（作品制作）の能力を形成するための手段としてとらえる傾向が強い。洞察力や批判的・分析的思考力の育成、生き方へのビジョンを問い返すような姿勢の育成は少なく、全体として表現重視の傾向が見られ、特に小学校でそれが顕著である。

エ 鑑賞学習の対象や内容について

当然ながら圧倒的に「歴史的な名作や作家の作品」「児童生徒の作品」が重視されている。「マンガやイラスト等の身近なアート」や「写真や映像」のようなサブカルチャー的表現・映像メディア表現は扱われておらず、デザインや工芸もあまり重視されていない。「表現」では図工・美術がカバーする領域が広がりつつあるが、こと「鑑賞」に至っては相変わらずファインアート重視の傾向が強い。

オ 鑑賞学習の教材教具について

使うのはやはり教科書（小：74.5%、中：69.1%）が多く、その割合も極めて高く、鑑賞学習では教科書がよく使われていることが分かる。次に、作品を見せる手段としてのメディアは、「美術全集などの図版（小：64.2%、中：70.2%）」、「市販の印刷教材や資料集（小：54.8%、中：83.3%）」が多く、印刷メディアがよく使われている。また、「教員が作成する自作の教材（小：51.5%、中：83.0%）」もよく使用されている。ただ、市販の視聴覚教材は小学校ではあまり使われていない。

また、パソコンソフト（小：17.7%、中：18.7%）、プロジェクター（小：29.7%、中：43.8%）、インターネット（小：25.7%、中：26.4%）は、意外と使われていない。「絵はがきやカード類（小：43.3%、中：25.3%）」、「カメラ（デジタルも含む）やビデオカメラ類（小：47.8%、中：42.7%）」等新しいものも積極的に取り入れる姿勢も見られる。特に小学校では、「絵はがきやカード類」を使ってアートゲームを取り入れている傾向が見られる。

カ 鑑賞学習の結果、成果、評価資料について

小・中とも、「ワークシートや鑑賞カードなど、児童生徒が自ら記入した学習過程の資料（小：83.4%、中：84.2%）」が、評価情報として最も多く使われていることが分かる。また、「相

互評価（小：76.6%、中：54.9%）」は小学校で、「レポートや感想文（小：61.9%、中：84.0%）」は中学校で、評価資料として多く使われている傾向がある。「ペーパーテスト」は過半数の中学校で使われているが、小学校ではほとんどない。中学校では授業の後に評価資料を収集するのに対し、小学校では児童の活動の過程で評価を盛り込む傾向が見られる。また、小・中ともに評価資料として「発表やプレゼンテーション」を使っているのは、意外と少ない。

キ 鑑賞学習の指導について

「(取組が) 消極的な理由」では、圧倒的に「授業時数が少なく鑑賞に充てる時間がない（小：78.0%、中：88.2%）」が多く、以下「近くに美術館等の施設がない（小：49.0%、中：45.7%）」「提示する資料が少ない（小：45.4%、中：44.8%）」「(鑑賞の) 教材研究する時間がない（小：35.0%、中：38.9%）」と続く。また、「(自分自身が) 鑑賞に関する知識が乏しい（小：37.7%、中：24.9%）」という回答からは、中学校で美術科教員の4人に1人は、自身の資質能力に問題点を抱えていることが分かる。

改善点のアンケートでは、「十分な授業時数の確保」が中学校で9割と群を抜いている。次いで「鑑賞に関する教員の研究・研修」「利用できる資料の充実」「実践方法の開発と啓蒙」と続く。“表現（作品制作）でさえ十分にできないのに、鑑賞まで時間がまわせない”という現実があるが、そのためにも、「鑑賞に関する教員の研究・研修」「実践方法の開発と啓蒙」が必要となってくる。

(2) 鑑賞ワークシートの工夫と改善

鑑賞学習の評価方法として、学習活動の行動観察、子どもの発言やつぶやき、感想文や振り返りカードなどが考えられるが、より信頼性の高い評価とするためには複数の評価方法を採用して評価することが大切である。ワークシートは子どもの学習の実現状況を見とる評価方法の一つとして有効であるが、文章での表現力が求められるようなワークシートの設定では“書く力”の優劣による評価のズレが生じる懸念がある。そこで、発達段階に合っていて、あまり“書く力”に依存しない評価の工夫と、子どもの鑑賞活動の広がりや深まりが的確に見とれる視点を明確化した鑑賞ワークシートを設定する必要がある。

(3) 評価の観点

観点別学習状況は、(ア)「造形（中は美術）への関心・意欲・態度」（関心・意欲・態度）、(イ)「発想や構想の能力」（思考・判断）、(ウ)「創造的な技能」（技能・表現）、(エ)「鑑賞の能力」（知識・理解）の四つの観点から評価する。内容別に、A表現は(ア)(イ)(ウ)、B鑑賞は(ア)(エ)となっている。B鑑賞の観点と趣旨は次のようになっている（表1）。

表1 小学校図画工作及び中学校美術のB「鑑賞」の評価の観点及びその趣旨

	(ア) 造形（美術）への関心・意欲・態度	(エ) 鑑賞の能力
小学校	自分の思いをもち、進んで表現や鑑賞の創造活動を楽しみ、つくりだす喜びを味わおうとする。	造形作品などに <u>関心や親しみ</u> をもち、そのよさや美しさなどを <u>感じ取ったり、味わったり</u> する。
中学校	主体的に表現や鑑賞の創造活動に取り組み、その喜びを味わい、美術を愛好していこうとする。	美術作品や文化遺産などに <u>親しみ、感性や想像力を働かせてよさや美しさ</u> を感じ取り <u>味わったり、理解したり</u> する。

(下線は筆者加筆)

(4) 美術館や博物館作成のワークシート（ガイドブック等）の内容と視点

近年、美術館や博物館の教育普及活動が盛んになり、それともなって各美術館や博物館が独自に子ども向けの鑑賞用ワークシートやガイドブックを作成するようになった。ただ、それらは

学芸員の視点で作成されている場合が多く、発達段階に合っているとは言い難いものもある。そこで、近府県の美術館のもので、比較的小児の発達段階を考慮したと思われる子ども向け鑑賞ワークシートの代表的な事例を分析した。

- 大阪の国立国際美術館では、館を訪れる子ども（小学校高学年・中学生を対象とした内容と推測される）を対象とした「ジュニア・ガイドブック（B5版：26ページ）」を発行している。ここでは鑑賞の視点を次の四つの項目に分けて解説している（表2）。

表2 国立国際美術館発行のジュニア・ガイドブックの鑑賞の項目と内容等

項 目	内 容 や 視 点
①「作品を見たときに最初に感じる印象や疑問」	作品についての第一印象からくる興味・関心の視点。
②「作者はどのようにしてその作品をつくったのか、そしてその作品をとおして何を訴えようとしたのか」	作家の考え方、作品制作の方法やテクニック（技法等）と、それらからうかがえるメッセージからの発想や構想と創造的な技能の視点。
③「その作品がつくられた時代はどんな時代だったのか、また美術の歴史のなかで、どのような位置にあるのか」	作品の特徴や歴史的価値、時代背景等についての知識や理解の視点。
④「作者がどのような生涯をおくったのか」	作家やその生き方についての興味・関心や知識や理解の視点。

- 滋賀県立近代美術館では、同館主催の展覧会「冒険美術」展のために子ども（小学生を対象とした内容と推測される）向けガイドブック（A5版：24ページ）を作成した。ここでは鑑賞を楽しむ視点を次の六つの項目で示している（表3）。

表3 滋賀県立近代美術館発行のガイドブックの鑑賞の項目と内容等

項 目	内 容 や 視 点
①「よく見てみよう」	全体を眺めたり部分を見たりする見方についての、興味・関心の視点。
②「くらべてみよう」	比べて見ることで、似ているところや違っているところに着目して新しい発見をする興味・関心の視点。
③「じぶんで考えてみよう」	作品を見て、その印象などを自分なりの考えでまとめ、より深く鑑賞する知識・理解の視点。
④「いろいろ想像してみよう」	作品に描かれているもの、色や形等から連想したり、想像したりする発想や構想の視点。
⑤「じぶんでかいてみよう」	作家の制作を追体験する創造的な技能の視点。
⑥「いいことおしえてあげる」	作品や作者を解釈する上で、参考になる事項や表現等の知識・理解の視点。

- 京都国立近代美術館では、1994年発行のジュニアガイドブックを改訂した改訂版ガイドブック（A4版：64ページ）を発行している。中高生だけでなく一般の来館者にも対応したものと推測されるが、美術館の社会的位置や鑑賞の基本的な姿勢や心構え、主な館蔵品をジャンル別に紹介して、近代日本美術の基礎知識を明解に記されている。また、編集には府内中学校教諭と同校美術部が協力しているのも特徴である。内容を分析すると鑑賞の視点は次のようにまとめられることができる（表4）。

表4 京都国立近代美術館発行のガイドブックの鑑賞の項目と内容等

項 目	内 容 や 視 点
-----	-----------

①何がどのように描かれているでしょうか。	作品と向き合い、見ることの興味や関心の視点。
②どのような色彩が用いられ、どのように組み合わせられているでしょうか。	主に色彩に着目した創造的な技能や知識・理解の視点。
③形（線や面）にはどんな特徴があるでしょうか。	主に形や形態に着目した創造的な技能や知識・理解の視点。
④作品の表面の状態にはどのような特徴があるでしょうか。	主にテクスチャー（質感）に着目した創造的な技能や知識・理解の視点。
⑤構図（形の配置の仕方）はどのようになっているでしょうか。	主に画面全体の構成や構図に着目した創造的な技能や知識・理解の視点。
⑥作者が伝えたいと思っていることはどんなことでしょうか。	作品から読み取れる作者のメッセージに着目しての発想や構想の視点。

上記3館に共通している鑑賞の視点として、次のことが考えられる。

- ①「作品を見る」という視点。見るという行為そのものを楽しみ、意識することで、作品全体や部分に注目したり、他の作品と比較してそれぞれの作品のよさや違いから発見する見方を促す視点で、評価の観点から見ると「造形（美術）への関心・意欲・態度」に重点をおいたものであろう。
- ②「作品や作家を知る」という視点。作家が活動し、作品が作成された時代や美術史における位置や意義など。作品の技法・形態・色彩・構図・質感などを知り、それらを媒体として作家は何を訴えようとしたのかなど、知識・理解に重点をおいた視点。評価の観点から見ると「鑑賞の能力」に重点をおいたものであろう。
- ③「追体験する」という視点。作家が作品を制作する時に使った表現技法や手法を、自分の手や体全体を使って再現したり表現したりすることで、作家の活動を追体験し技能・表現のスキルの理解・習得や、さらにそれらの体験を通して作家の生き方にまで迫る視点。評価の観点から見ると「鑑賞の能力」に重点をおいたものであろう。

(5) 研修講座におけるワークシートの作成の試み

今年度、新規の研修講座として奈良県立美術館において「トワイライト『美術館ナイト・ツアー』セミナー」を開催した（写真）。これは“学校と美術館の連携を図る”ことを目的としたもので、幼・小・中・高・障のすべての校種から募集して実施した。定員20名のところ88名の希望があり、教職員の美術鑑賞への関心の高さがうかがえる。2回開催のうち、第2回目のセミナーBにおいて、鑑賞ワークシートの作成を試みた。同館で開催されていた「『モネー光の賛歌』展」を題材に試作した鑑賞ワークシートを参加者に体験してもらい、各学校段階に応じて内容や表現等



写真 『美術館ナイト・ツアー』研修風景

が適切かどうかを添削してもらった。講座後のアンケートには、“いろいろな視点を投げかけて鑑賞するのによい”、“オープンエンドの設問で子どもたちが感じたことを書けるのがよい”、“ワークシートのようなものがあると、比較したりしてより深い見方ができるように思う”、“ただ漠然と「作品を見て何を感じた？」と聞くのでは評価はしにくいので、ワークシートのような

視点があると分かりやすい”等の感想が寄せられた。また、“鑑賞にワークシートのようなものは必要なのか”“言葉以外のもので感じ取る力も必要だ”といった感想もあった。

ワークシートの作成では、小学校低学年では「見る」という行為に興味や関心をもたせるような視点を中心に、中・高学年では描かれている内容や画面の表層等に注目する視点やヒントを与えて「観る」ことに重点をおいた。さらに、中学・高等学校を想定したものでは、より広がりや深まりが期待できるようにオープンエンド形式や作者のメッセージを「診る」ことが可能なような設定を心がけた(図)。



図 研修講座で使用したワークシートの例

6 おわりに

「美しいものには訴える力があるから、誰でもすばらしい作品を前にすると感動することができる」という考え方がある。果たしてそれほど簡単なものなのか？感動できるかどうかは、作品の質も大切だが、どれだけそれを受け入れることができるかである。感動する心を広げ深めるためには、多様で豊かな経験と知識が必要である。心理学者のパーソンズ (M. Parsons) は、人間の美意識の発達について次の五つの段階を提案している。

- ① 作品を見て刺激され、個人的な好き嫌いや連想から判断する。
- ② 作品に表されている対象の美しさ(快さ)とか再現描写の技量に注目する。
- ③ 美醜に関係なく、作者の体験や感情が作品に、どのような形で表現されているかに注目する。
- ④ 作品の形式やその背後にある歴史的・社会的な状況を分析する。いわゆる「美術批評」の活動も含む。
- ⑤ 自分自身の体験と責任に基づいて作品の価値判断を行う。

美意識の発達は、①の個人的な鑑賞体験の積み重ねの段階から、②以降の多くの人と共有できる普遍性のある段階へと、線的ではなく雪玉のように膨らんでいく。そのためにも、学校教育の段階で可能な限り多様で豊かな鑑賞と表現の体験を充実させる必要がある。

参考・引用文献

- | | | |
|--|-----------|------|
| (1) 文部省 「小学校学習指導要領」解説—図画工作編— | 日本文教出版 | 平13 |
| (2) 文部省 「中学校学習指導要領」解説—美術編— | 開隆堂 | 平11 |
| (3) 「図画工作科・美術科における鑑賞学習指導についての調査報告—2003年度全国調査結果—」 | 日本美術教育学会 | 2004 |
| (4) 「ジュニア・ガイドブック」 | 国立国際美術館 | 2000 |
| (5) 「冒険ガイドブック」 | 滋賀県立近代美術館 | 2000 |
| (6) 「美術との出会いがきっと楽しくなる所蔵作品基礎知識」 | 京都国立近代美術館 | 1997 |
| (7) 並木誠士編 「現代博物館学」 | 京都造形芸術大学 | 1998 |